図書紹介

『武器としての「資本論」』

東洋経済新報社、2020年4月
B6判、290頁、1600円

白井　聡　著

著者の執筆意図は次の通りです。

「『資本論』は、社会を内的に一貫したメカニズムを持った一つの機構として提示してくれるのです。ここが『資本論』のすごさなのです」。

（世の『資本論』入門書には）「このすごさが生き生きと伝わってくるものが見当たりません。だから『資本論』の偉大さがストレートに読者に伝わる本を書きたいと思いました」と。

確かに全く新しい『資本論』入門です。マルクスの「商品」「包摂」「剰余価値」「本源的蓄積」「階級闘争」という重要な概念から、現在を照射します。

第1講から第14講で構成されています。第4講、新自由主義が変えた人間の「魂・感性・センス」―包摂とは何か―が興味をひきました。

「新自由主義はさまざまなものを変えました。『あらゆるところに競争原理を導入しろ』と国営事業の民営化を進め、小さな政府を実現し、大企業もどんどんスリム化して、人を減らし……利益を増やしてきた」。

「だが、新自由主義が変えたのは、社会の仕組みだけではなかった。新自由主義は人間の魂を、あるいは感性、センスを変えてしまったのであり、ひょっとするとこのことの方が社会的制度の変化よりも重要のことだったのではないか」。

（一例は）「『人は資本にとって役に立つスキルや力を身につけて、はじめて価値が出てくる』という考え方です」

これは、資本による労働者の魂の「包摂」が広がっている指標だと見ます。その結果、「実はわたしたちが気づかないうちに、金持ち階級、資本家階級はずっと階級闘争を、いわば黙って闘ってきたのです。それに対して労働者階級の側は、『階級闘争なんてもう古い。そんなものはもう終わった』という言辞に騙され、

ボーッとしているうちに、一方的にやられっぱなしになってしまったというわけです」（第11講）

「寅さん」と階級意識、銀座・泰明小学校のアルマーニの制服、我が国の本源的蓄積など面白い知見に満ちていて、読みやすい本です。

コロナウイルス・パンデミックは猛威を振るい、感染者は一千万人を超え、ワクチンも治療薬も未だなしです。ポスト・コロナの社会を根本的に考える絶好の手引きに、本書はなるでしょう。

（吉田武雄・所員）